



『三国志』の時代の文学

人間文化学部 国際文化学科
教授 柳川 順子（やながわ じゅんこ）

連絡先 県立広島大学 広島キャンパス 1713号室
Tel 082-251-5178 (代表) Fax 082-251-9405 (代表)
E-mail yanagawa@pu-hiroshima.ac.jp
(@は半角に置き換えてください。)

専門分野： 中国古典文学

キーワード： 五言詩歌、漢代宴席文芸、『三国志』、建安文壇、曹操、曹丕、曹植

● 現在の研究について

『三国志』の舞台となった3世紀初めは、中国史上、古代から中世への転換期であるのみならず、文学の世界においても新たな動向が生れた画期的な時代だとされています。その中心は、魏王朝の創始者曹操が集めた文人集団、建安文壇です。では、建安文学のどこが新しいのでしょうか。

このことを明らかにするためには、建安文壇の性格を、これに先立つ漢代の宴席文芸との関係において把握する必要があります。私がこれまでに取り組んできた研究は、この建安文壇が登場するに至った経緯を、漢代宴席文芸からの流れの上に位置付けようとしたものです。

建安文学の第一の特徴は五言詩の勃興にあります。漢代の正統派文学である辞賦や、『詩経』『楚辞』といった漢代以前の古典詩に淵源を求めても、その歴史的必然性は見えてきません。これは、建安文壇が宴席を舞台としていることを捉え、こうした文芸活動が、漢代上流社会で長らく盛行してきたことに目を留めてこそ見えてくる文化的事象なのと言えます。そこで、漢代の宴席という場に着眼して、建安文壇で結実する五言詩や楽府詩（歌謡曲の歌詞）の源流を探り、また、同じ宴席で、歴史物語に取材した語り物文芸や演劇などが行われていたことを明らかにした上で、五言詠史詩という新しい文学ジャンルが誕生した経緯を明らかにしました。

現在は、『三国志』の時代を代表する文学者、曹植の作品に焦点を絞って研究を進めています。

● 今後進めていきたい研究について

曹植の文学は、漢代宴席文芸の流れを汲みながらも、もはや“みんなの歌”ではない、強い文学的個性を持っています。この特質は、彼が父曹操の後継者問題をめぐって、後半生、兄曹丕との間に不協和音を生じたことが深く関与しているでしょう。そして、曹植ならではの作品は、社交的な場から離れ、孤独の中で紡ぎ上げられたものであるが故に、時空を超えた読者を獲得することとなったのではないかと考えます。

曹植の紡いだ言葉は、先立つ時代のそれと何がどう異なっているのか。彼が切り開いた新しさを、他者はどう受けとめ、継承しているのか。こうした視点から、曹植の作品、及び彼を敬愛した文学者たちの作品を精読し、中国中世における文学というものの萌芽を浮かび上がらせたいと考えています。

文学は、利益最優先の現代社会においては無用の長物かもしれません。ですが、長い歴史の中で、どの文化圏にも存在し続けてきた、人間にとって欠くことのできない滋養なのだと思います。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

地域の皆さんと、『三国志』やその時代の文学作品をじっくり読んでみたいと考えます。特に、曹操の事跡は、組織の中で管理職を務められる方々に興味を持っていただくと確信します。

また、高等学校の国語の先生方と勉強会を持ち、漢文の面白さを共有したく思います。

● これまでの連携実績

本学が主催・連携する公開講座、及び教員免許状更新講習で講師を務めています。